

副作用が生じた際の使用中断につながりやすい。

副作用

アダパレンは、使用した患者の約3～6割に副作用が生じる。BPOはアダパレンよりも少ないが、12週間の投与試験では37.3%³⁾、1年間の長期臨床試験では49.4%に副作用が発現している⁴⁾。重症な副作用は少ないが、副作用が生じると患者は容易に治療を中断するため、使用開始前に起こりうる症状、時期、副作用を起こさない方法、起こっても軽症で済ませる方法を教えておく必要がある。

では、具体的に副作用対策はどのようにしたらよいのだろうか？ アダパレンの副作用は、ほとんどが刺激による反応と考えられるが、BPOの副作用はアレルギー性の反応と刺激による反応の2種類に分けられ、日本人では約3%にBPOのアレルギーを認める。

アレルギーを持つ患者ではBPO使用直後より強いアレルギー性接触性皮膚炎を生じる。残念ながら、現在これに関しては回避する手立てはない。できるだけ軽症のうちにアレルギーの存在を把握し、早期に別の治療法に変更する必要がある。

もう1つの副作用、刺激症状として生じる紅斑、乾燥、落屑、痒痒、刺痛感・灼熱感などの症状は20～30%に認められ、治療中断の大きな原因となっているが、これらは使用方法によって回避・軽減することができる。刺激反応はアダパレンやBPOが患者の忍容以前に効果が強く生じた状態と考えられる。忍容までにかかる時間は個々の患者によって異なるが、副作用を訴える期間から1～2週間程度が多いとされ、ほぼ1か月までに刺激反応も収束することが多い。

急速に強い効果が出現すると、刺激感を忍容できない患者は容易に治療を自己中断する傾向は、アダパレン中

心の治療の時代と、BPO中心になった現在でも状況は大きく変わってはいない。

副作用を出さず、効果を出すためにはどのような使い方をすればよいのか？

～使用時期に応じて、使用方法を変更していくことが重要～

刺激による反応を軽減させるためにはアダパレンやBPOの導入から1～2週間、患者によっては約1か月の間は外用剤の使用法に工夫が必要である。また、この時期はアレルギーを確認するための重要な時期でもあるため、効果を急がずに患者の忍容を待つ時期ととらえることが必要である。

患者には単に副作用の起こりにくい塗布方法を指導するのではなく、①アレルギーの有無を確認しながら、肌の忍容を待っている時期、②肌の忍容を待ちながら、効果を上げていく時期、③薬の効果をできるだけ上げる時期の3期に分けて薬の使い方や薬剤を変更していくことの必要性を伝えておくことが必要である。説明が不十分であると、長期にわたり導入時の塗布方法を続けた挙句に、効果が出ないという不満につながることも多いので注意が必要である。

副作用を回避するための、具体的な導入時の使用方法の工夫 (使用開始1～2週間の使用方法)

①塗布量を減らす、②塗布範囲を減らす、③塗布時間を減らす、④保湿剤を併用する、⑤塗布回数を減らす、以上を組み合わせることにより副作用を軽減することが可能となる(図9)。

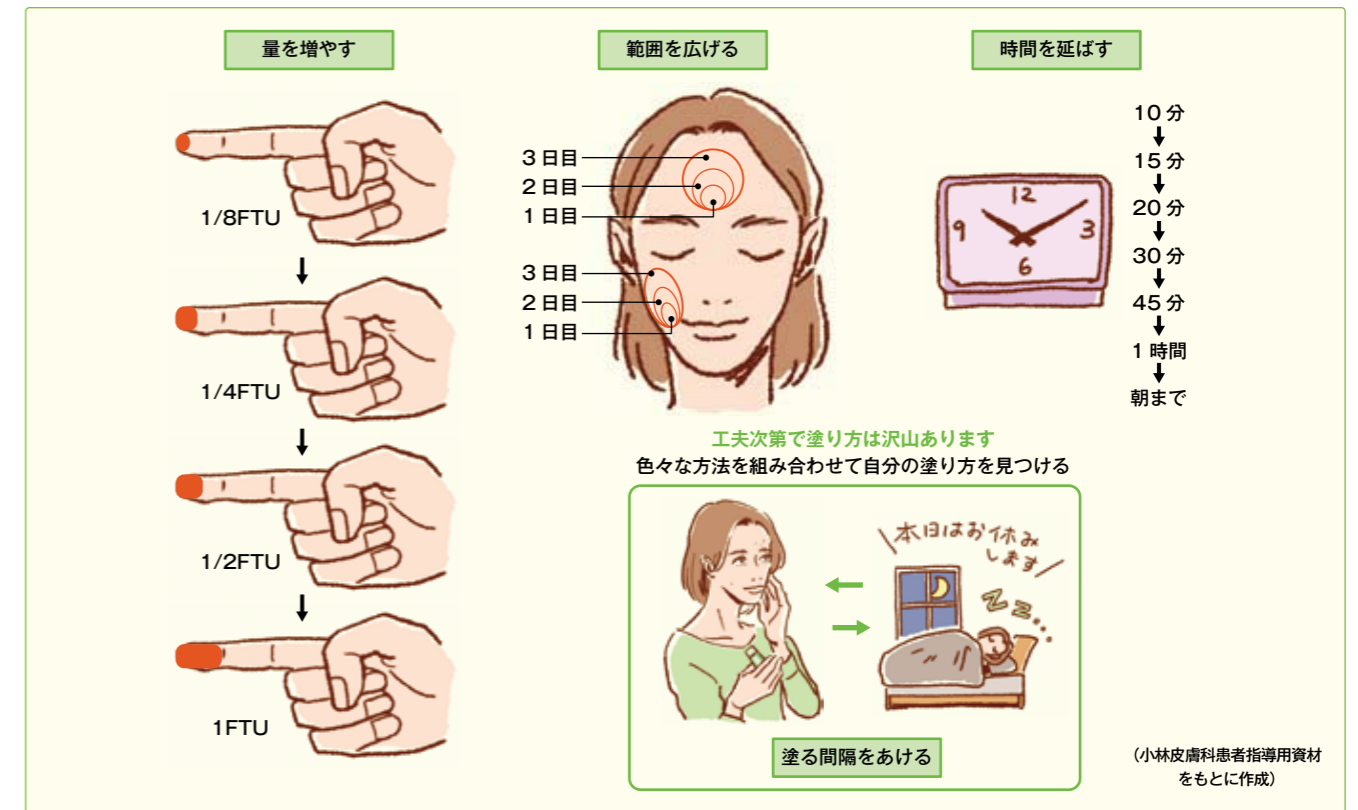


図9 工夫次第で塗り方はたくさんあります

塗布量を減らす

BPOの基本使用量は、15gチューブであれば1回に1FTUとされているが、最初は炎症性皮疹の上に点状に塗る方法や塗布量を1/8FTU程度より開始、徐々に量を増やして1FTUに近づける方法などがある。

塗る範囲を減らす

基本の塗り方は口周り、目の周囲などを除き全顔に面で塗るとされているが、使用開始から1～2週間は皮疹の部分のみにスポットで使用し、発赤や接触性皮膚炎、水疱などのアレルギー症状が起こらないことを確認したうえで徐々に範囲を広げていき、全顔塗布を目指していく。

塗布時間を減らす

基本の使用法は朝まで塗布し、朝洗顔で流し落とすとされているが、導入時は短時間(15分程度)で洗い落とすショートコンタクトセラピーから開始し、刺激反応がなくなれば時間を延長していく。

ショートコンタクトセラピー

アダパレンやBPOの使用開始時や乾燥肌、アトピー性皮膚炎などの患者に使用する場合、患者の忍容を超えた強い刺激が生じるのを防ぐために有用とされる塗布方法。BPOは5～10分程度で洗い流しても*C. acnes*に対する抗菌効果は出ると考えられているため⁵⁾、刺激による治療中断を減らすのに有用な方法と考えられる。

洗顔後、BPOやBPOの配合剤を炎症性皮疹の上だけ